慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	J. Griffin, Homer on life and death
Sub Title	
Author	真下, 英信(Mashimo, Hidenobu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1981
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.51, No.3 (1981. 12) ,p.154- 161
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19811200-0154

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ドの訳者として最高である。

第三に、翻訳そのものについてである。大冊の著書を翻訳する場合、共同訳という方法と個人訳という方法とがある。いづれの方法にも一長一短があって直に優劣を論じ難いが、共同訳にあっては、互の理解の不足を補いあえる利点もあり、共同訳でなくしてはあり得ないような名訳もあるが訳者間に可成り意見の交換があって著書そのものの理解に於いてコンセンサスのない時には余りよい結果が生れないこともある。単独訳の場合には理解の統一が容易である。このような大冊の翻訳には多大の時間と労力とを要するにかかわらず、独力でこの事業を完成されたことに敬意を表したい。翻訳そのものも極めて入念である。特に巻末に付された原語索引は、教授の前任者である世良教授のミッタイスのドイツ法制史の翻訳の模範を踏襲せられたものと思われるが、極めて有益である。これによってメイトランドを基幹とする英和憲法史小辞典が出来るからである。但しこの作成は相当の難事である。この点についても教授の御労苦に感謝したい。

以上、本書は極めて有意義な出版と思う。最後に、一つ考えさせられる問題がある。それは定価が一万円であることである。メイトランドは英国最高の歴史家である。かのマルク・ブロックがメイトランドから学んだものは多大であった。彼の所謂「全体史」の構想を得たもとの一つがメイトランドにあることは間違いのないものであろうし、またメイトランドを崇敬することも一かたならぬものがあった。『封建社会』の序文をメイトランドの言葉が結んでいるのは、そのことの証左である。従って単にイギリス史のみではなく広く歴史研究、あるいは政治・法制・社会の研究者に多くのことを教えてくれるに違いない。しかし、一万円というのはいかにも高く学生に購入をすすめるのもためらわれる。これはしかし出版社の責任というよりはむしろ教える我々の側にも多大の責任があるような気がしてならない。時間の不足その他の理由はあるが、こうした古典的な著書、現代の学問の根底にまで溯っての勉学に学生の関心を向けさせ今日発表せられている諸業績をその根抵にあるものを背景に理解させるように更に努力して、こうした名著の普及版が可能になる日の一日も早く来ることを希望してやまない。

J. Griffin ;

Homer on Life and Death. Pp. VI+218.

Clarendon Press, Oxford 1980. £12.50.

真下英信

ここに紹介しようとする本書は、Balliol College, Oxford の Fellow として、Tutor として著者が研究、教育に携わってきた経験をもとにして執筆されたものである。著者によれば、ホメーロスについて論文を書く学生達は、初めからミケーナイ時代の土地所有とか複雑な定形語句の研究とか極めて専門化、細分化された領域の論文や本を読むことを強いられている。そのために、

ホメーロスの詩自体は殆ど無視に近い状態におかれている。こうした風潮は、今日の学問のあり方と深く関係しており、我々もその陥穽に落入らないよう常に心しなければならないのであるが、この状況のために、著者自身がホメーロスの詩自体を講義することになり、その成果をまとめたのが本書である。

本書の特徴を一言でいえば、M. Parry に始まり、半世紀以上にわたり流行している所謂 formulaic theory については全く言及がなされていないことである。この理論がそれなりにホメーロスの詩の解明に貢献した事実を認めるに著者は吝ではない。しかしながら、この理論では、今日まで伝わる詩がいかに創作されたかを解明できず、かつ又、詩の審美的な理解にも思った程貢献していないと著者は考えている。更に、R. Finnegan の研究 (*Oral Poetry*, Cambridge 1977) を踏まえて、"oral literature" と "written literature" と二つに峻別する方法は正しくないとし、Parry の方法の限界を指摘している。

では、著者はどんな方法でホメーロスの詩を検討しているのであろうか。それは、仮に〝古典的な手法〟とでも呼べようか、Parry の方法には欠けているが、古くギリシャ人自身も試みた著者の言う審美的方法 (aesthetic methods) である。更に、最近の流行ともいえるオリエントの神話や旧約聖書とホメーロスの詩との比較検討が行われているのみでなく、ゲルマン、アイルランド文学とも同様の考察がなされている。

ここで簡単に、イーリアスとオデュッセイアーの作者問題について述べておこう。著者によれば、両作品は単に優れた物語であるばかりではない。極めて個性的な登場人物、忘れ難くかつ象徴的な場面、人間の生と死の本質を把握した多面的な映像が作品に示されている。イーリアスの語句には、想像される以上に深い意味が込められており、ユニークな統一ある世界は一人の作者によるものである。他方、オデュッセイアーは、イーリアスとは異なる独自の世界が展開されているが、これとても一人の強力な想像力の持主が一貫して創り出した作品である。

そして、著者はこの二たの物語にみられる、登場人物やその行動を神話の領域にまで嵩めている世界とは、一体何であるかを解明しようとしている。あたかも、心理学者が被験者の夢を聴いたり、SCTを実施して人の心の深層を把握していくように、ホメーロスの詩を分析していくのである。

次に各章ごとに内容を簡単に紹介してゆこう。

I. Symbolic Scenes and Significant Objects

トロイの人々が、ヘクトールの死を嘆くさまは〝あたかもこの眉輪の多いイーリオスの町全体が、頭からそっくり火に燻べられ焼亡するのとそのままだった〟(Il. XXII. 410ff. 以下、両作品とも翻訳は呉茂一訳(岩波文庫)による)。著者によれば、こうした表現は単なる事件の描写ではない。詩人は、物語にとって重要な意味を持ち、これから描写されるであろう事件を仄めかしているのである。この手法こそ、詩人が意図的に行っているもので、口承叙事詩の研究にとって重要なテーマである。

しかし、詩人は、個々の詩に込められた含みある示唆的な表現が何を意味するのかを仄めかしている所は少なく、多くは黙しており何も語っていない。

本章の前半は、こうした象徴的、示唆的な語句が何を意味し、どのように用いられているかを論じている。ここでは、本書で論じられている事例を網羅することは出来ないが、評者が面白く読んだ主題は、イーリアス三巻にみられるパリスの服装をはじめとする着物の描写、同じく六巻のヘクトールとアンドロマケーの出合いの場面、二巻の笏の用法などにみられる象徴性を論じた所である。この他にも、槍、民会の場所、食物、会食、などありふれた描写に含まれている意味も論じられている。

ところで、こうした象徴的な表現を用いる技法は、単なる文学上のスタイルの問題ではない。むしろ、ホメーロスの詩的かつ全体的世界観に深く根差しているのである。

本章の後半は、ホメーロスの詩的世界がいかに象徴的な世界であるかを論じている。この点に関しても、具体的事例は本書を参照していただくとして、主な主題だけを挙げてみると、嘆願、誓約、同盟締結、贈物の贈与、などの場面が挙げられよう。そして、これらの場面を通じて、人が掟を曲げれば洪水が起ったりするような超自然的な世界が両詩の背後に存在することが述べられている。

II. Characterization

ホメーロスは人の全性格を一言で言い表わす技を持っている、とあるスコリアは述べている。しかし、今日、ホメーロスの作品に統一的なまとまりある性格描写がなされているのか否かの問題は、両詩の成立問題と絡み合って、複雑な様相をおびている。本章で、著者は、性格描写をめぐる学説史を簡単に回顧した後に自説を展開している。

従来、両詩の成立問題に関して、分析派に組する人々、例えば、Kirchhoff, Wilamowitz, などは、両詩は何人かの手を経て成立した〝合作〟と考えている故に、そこには心理的に一貫した登場人物は存在しないとしている。他方、"oral theory"に立つ人々は、両詩は formulaic style により成立している故に、詩人は個性ある人物を創作出来なかったとしている。

これに対して、著者は、formulaic な表現の中にも、アキレウスとアガメムノンの対立描写からも明らかなように、詩人は変化に富んだ豊かな性格描写に成功しており、単なる紋切型の人物が登場しているのではないとしている。イーリアスでは、ドーロンの例を始めとして、兵士が命乞いをしたにもかかわらず殺されてしまう場面が五回あるが、詩人はここに登場する人物を場面に応じて極めて詳細に描写しており、様々な陰影を与えるのに成功している。更に、登場人物の性格も一貫しており、生死の瀬戸際での嘆願とその拒否という場を通して、生死の極限に立った英雄達の個性をうまく描いている。

この点、オデュッセイアーも同様である。オデュッセウスはカリプソーやキルケー、そしてナウシッカーなど、女神や人の娘に

慕われながらも、全て別れて行く。詩人は、これら各々の離別の場面で優れた性格描写を行っている。オデュッセウスが、一年間楽しく過した現実的女性ともいえるキルケー、楚々たる感じで娘の本質をはっきり現わしているナウシッカー、オデュッセウスとの離別を嘆きながらも、女神としての矜持を失わないカリプソー、いずれも個性豊かな〝女性〟が描かれている。普通の人が流浪の間に彼女達に邂逅したならば、妻も故郷も忘れてしまったかもしれない。しかし、オデュッセウスは三人とも拒み、堅い決意をもって妻のもとへ帰って行く。これこそ、オデュッセイアーの主題であると同時に、あらゆる苦難に耐えるオデュッセウスの性格が見事に描出されているのである。

勿論、イーリアスとオデュッセイアーの描写方法には差がある。例えば、嘆きの場面を考えてみれば解るが、オデュッセイアーは過去を回顧的に見ているのに対して、イーリアスは現在の状況を嘆いているのであり、そこには深い悲しみが歌われている。従って、Scott, Bethe, Reinhardts などが、ホーロスの登場人物は単純で深みに欠けているとしたのは誤りである。登場人物の多面的な性格は統一されており、優れた性格が描かれている。詳細な具体例は本書に委ねるが、例えば、アキレスの情熱的な性格を、行動のみか言葉でも、詩人はよく示している。最後に、イーリアスとオデュッセイアの世界の差異は何かを論じ、本章を閉じている。

III. Death and the God-like Hero

本章では、英雄達の生と死を通して、両作品に描かれている英雄世界の特徴が考察されている。

英雄達が力があり大きいということは、二次的な意味しか持たない。英雄世界の本質は、神々が絶えず彼等の行動に干渉している点にある。加えて、英雄は神々に比せられており、〝神にも等しい人〟とか〝不死なる神々にも似た人〟とかその他、種々な epitheton を付せられている。しかし、両者の間には厳然たる相違が介在している。英雄といえども、死すべき定が課せられているのである。しかも、彼等はこの事をはっきりと自覚して行動している。神々が愛する英雄達は、勇敢に戦って死んでいくのである。詩人は英雄達の戦闘場面の描写で、epitheton を用いながらも彼等の言行に深い意味と情感を賦与することに成功している。ところで、神々は、英雄達の敗北や死を常に防いでくれるわけではない。オデュッセウス以外の英雄達の多くはアキレウスを始めとして殆ど死んでいく。これとても全て神々の定に従った結果でしかない。英雄達の全存在は戦いと死に示される。彼等は戦い、従容として死んでいく。勿論、戦士が戦いを忌避しようとする場面がないわけではない。たが、Selfrespect, respect for public opinion, the conscious determination to be a good man —these motives drive the hero to risk his life; and the crowning papadox of the hero, the idea of inevitable

death itself. 死は常に彼等の面前にある。不死ならば、その人は英雄ではないのである。英雄は死を敢然と受入れなければならない。詩人は戦いよりも死を中心に英雄の光栄を歌っていく。この光栄（κλέος）のみが英雄の報酬である。だが、死は哀である。ヘクトールは英雄として死んだが、the glorious death which Hector finally achieves is no comfort to his defenceless family and friends, upon whom the emphasis fall. (p. 98) この点はアキレウスとても同様である。〃富でも幸福ででも世のすべての人に立ち優って、ミュルミドーンらの君ともなって治めて来た〃（Il. XXIV. 536-7）父ペーレウスにとってと同じく、アキレウスにとってもヘクトールを倒した勲は、何の意味も持ち得ないのである。しかし、英雄は戦いより離れることが出来ない。

オデュッセイアーの世界でも戦いの空しさは知られているが、その在り方はイーリアスと異なる。「Nekyia」に居るかっての戦士達の言葉によれば、彼等は、自尊心をもって戦った兵士ではない。むしろ、神々の定として致方なく外から課せられた苦難を忍従したにすぎない。

これら英雄達の生と死と戦い、オデュッセウスの苦しみ、いずれも何ら物的な報酬をもって報われはしない。後世の人の賞讃をうむのみである。こうした英雄の行動に κλέος を与えるのが詩人の役割である。英雄は自己の勲のために死んだのではないし、友人のために死んだのでもない。聴衆に人の命の偉大さと果無さを教える歌に、彩を与えるべく死んだのである。

IV. Death, Pathos, and Objectivity

イーリアスは英雄達の戦死のみを歌った作品ではない。例えば Il. XI. 262-263 のように一雑兵の戦死の場面も単々と描写されている。これら雑兵達は物語では殆ど重要な意味を与えられておらず、死ぬために登場したような印象を受けるが、こうした描写方法は本詩の大きな特徴の一つで、「ニーベルンゲンの歌」などと大きく異なる所である。

ホメーロスの歌い方は客観的であり、自己の主観を詩中に込めたりするウェルギリウスとは対照的である。本章は、雑兵の死を単々と描写していく場面が、実は豊かな感情を伝えるに重要な意味があることをスコリアを引用したりしながら証明している。

勿論、Il. XXII. 401-404 のように、同情と哀しみの表現が示されている所もある。しかし、一見感情を押さえた文体で、手短に僅か数行で歌われている中にも、ホメーロスは、望郷の念、身近な友人さえ防げない死、死体遺棄、寡婦、孤児、子を失った父母、若き夫の死、命の果無さ、など種々な主題を用いながら、豊かな情感で客観的に描写することに成功している。因に、こうした考えは、分析派の人々の性格描写論に対する徹底的な批判と言えよう。

最後に、一兵卒の死を僅か数行で描写していく手法は、死をテーマとする詩に、感傷と残虐性が入り込むのを防止する役割を果している旨が論じられている。

ところで、評者は、本章の終りの部分で、叙事詩の偉大さとは何であるかを、墓碑銘とイーリアスにみられるこうした技法の類似性を指摘しながら論じている点に、非常な興味を覚えた。

V. Gods and Goddesses

ホメーロスの詩には、徹底した多神教の世界が歌われている。我々は、この神々の世界を真摯なものとして把握すべきか、それとも、単なる文学的虚構でしかないと解釈すべきかは議論の分れる所である。本章はこの問題を論じながら、両詩の宗教を論じている。

著者は、上述の二説の内、前者の立場に立ち、まず、J. M. Redfield の *Nature and Culture in the Iliad*, Chicago 1975 を俎上に載せ、その社会人類学的解釈を斥ける。神業は単なる façon de parler にすぎないとする Kirk 説（*The Nature of Greek Myth*, Harmondsworth 1974 など）も批判していく。そして、ホメーロスの神々は numen を欠くものではなく、単なる Literary God 以上に扱われるべきことが論証されていく。

ホメーロスの世界の人間は、祈りの場面が数多くあることからも解るように、敬虔である。詩は宗教的行動に満ちている。神々は、威厳と権威に常に欠けているわけではない。ゼウスのうなずき（Il. I. 528-530）に象徴されるように、人間に対して神は大きな力を発揮する。例え、神々に軽佻浮薄な面があったとしても、神々の威厳は否定されるべきでない。怒りに狂って、アガメムノンに向けて剣を抜こうとしたアキレウスを諫止したアテーナー女神の動きには、完全に神性が認められるとして、Redfield や Kirk の解釈に反対する。

次に、魂や冥界にたいても論じ、魂や冥界は Redfield が述べているような "a self that exists only for other" や "a non world" ではないとしている。

ホメーロスの詩は、英雄の定と行動の謡であって、死と神々の世界に深く係り合っている。神々はオリンポスの輝かしい光の世界にいるが、死者は永遠の暗闇が交互する世界に生きている。英雄は、〝神の如く〟になれるが、所詮は老いて死ぬ定である。こうした状況にあって、神々の世界は、物語に含蓄を与え、物語を悲劇的にするのに大きな効果がある。

オデュッセイアーの世界でも、多少の差はあるが、イーリアスのそれと同様、神々は遍在し、重要な役を荷わされている。人間の受難は、人が神を蔑にした結果であり、物語は単なる冒険譚ではないのである。登場人物に偶然と思われる事々も、神々の配慮によるもので、そこは偶然の世界ではなく、全てを神々が支配する世界である。

最後に、神が人間の形をとるという、ギリシァ文化を理解する上で重要な鍵となる現象の意味を論じる。

そもそも、ギリシァ神話は、他の多くの民族の神話にみられる想像力や空想力が欠けた底の浅いものであるとする Kirk 説は正しくない。他の民族の神話にみられる不合理な世界の欠如は、空想力の不足によるものではない。ホメーロスは、神と英雄の対

照、相互作用によって特徴ある世界を創り、神話の不合理な面を除去し、受難や破滅のもとでも失われることのない人間の高貴さを歌ったのである。

VI. The Divine Audience and the Religion of the *Iliad*

本章は、観客としての神々とホメーロスの宗教観を論じている。

懲罰的、かつ全知であり空に御座す神という概念は、諸民族に遍く知られている。ホメーロスの世界を思うに、この概念はゼウスによくあてはまる。しかし、ゼウスは他民族の神々と異なり、時には懲罰もせずに、あたかも芝居を見物するかの如く、人世界を見下している時が多々ある。勿論、神の介入場面と傍観場面の二つを峻別する事は不可能の場合もあるが、こうした傍観的な態度をとる神は、人間に対して如何なる関係に立っているのかを解明すべく、神々の本性、全体像、並びにイーリアスを特徴付けている生と死の問題が、本章で論じられている。

ホメーロスの世界では、人間の世界と神々のそれが互いに相手を必要とする存在である。この関係が、相互に、相手の認識のみならず自己の認識をも高めた。英雄は〝神の如く〟と称されもするが、所詮、神と争える身ではない。他方、神々は英雄を自由に操れる。

他方、神々の世界には、真摯さと浮薄さ、偉大さと低俗さという相反する面が含まれている。英雄達にもまた同様な面があり、彼等は神にも比せられるかと思えば、木の葉の如くに散り行かねばならない。これら両面は、単なる文学上の問題ではなく、イーリアスの世界にとって不可欠なものであり、叙事詩の世界を真に悲劇的かつ宗教的世界にする役割をしているのである。

ところで、神にとって、自己の力を誇示し、喜びを完全にするために、人間の存在とその受難が必要である。イーリアスで、神は自己の幸せに耽っているのみではない。時には懲罰者として、時には芝居の見物人のように人間を見ている。丁度、人々が争ってパトロクロスの送葬競技を見物しているように。だが、ここにこそ真に悲劇的な局面がある。〝ゼウスに親しい〟ヘクトールに、ゼウスは死を定め、かた彼が死んでいくのを傍観しなければならない。しかも、神があたかも観客の如く地上の事件を傍観することにより、人間世界の事態は一層破壊的になっていくのである。そして、この神々の態度こそ、我々の感情を一層揺ぶると同時に、人間の生と死の本質を開示する機能を果しており、イーリアスの優れた技功の一つである。

以上、内容の紹介を少し長くしてきたが、それは、本書は非常に啓蒙的な書であり、今後、〝古典的解釈〟の代表書として長く読み継がれていくと思ったからである。

しかしながら、本書にも問題がないわけではない。内容の重複をここで云々する気はないが、一番の問題は、ホメーロスの詩句に込められていると著者が考えている象徴性の解釈の正否であろ

う。なぜなら、確に、ホメーロスの詩句に込められた象徴と含蓄の解明は重要である。しかし、著者の解釈がどこまで妥当なのか、議論の余地のある所であろう。心理学者の言う「了解過剰」が本書にはないかどうか、今後長く議論を呼ぶことになろう。

最後に、本書はホメーロス研究の学説史上からみれば、最近とみに強くなっている unitarian の立場（e. g. C. Moulton, *Similes in the Homeric Poems*, Göttingen 1977）に立っており、この風潮を一層強化した書といえよう。

(81. IX. 10)